



是乃居所也
風之吹子
松あり
記り
費
平

海村

柳
儿
董
山
良
村

山花の香気は遠くまで
わたる。春の風が吹く
たびに、花の匂いが
空を舞う。山は静か
だが、花の音が
心に残る。春の山は
美しい。花の香気は
遠くまでわたる。

山花の香気は遠くまで
わたる。春の風が吹く
たびに、花の匂いが
空を舞う。山は静か
だが、花の音が
心に残る。春の山は
美しい。花の香気は
遠くまでわたる。

山花の香気は遠くまで
わたる。春の風が吹く
たびに、花の匂いが
空を舞う。山は静か
だが、花の音が
心に残る。春の山は
美しい。花の香気は
遠くまでわたる。

山花の香気は遠くまで
わたる。春の風が吹く
たびに、花の匂いが
空を舞う。山は静か
だが、花の音が
心に残る。春の山は
美しい。花の香気は
遠くまでわたる。

新くこのやまにふのりしりしり
しりやちかまのまに枝かまのま
歌陣のまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま

山 村 董 村 董 山

帰深はまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま

村 董 村 董

まのま

董

まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのま

董村

のしやうとあはれふりてははげし
あつてのこゝろをさう実あふ
と申すはねはけりきせり月
ひのくろく沙汰のそく
古館のちのち子強ん道と
さきまはねと物あはれあめ
あつてはちいさの先子進
さきまはねと物あはれあめ
風のそよぶやうに物あはれ
山

嵐山
標山
山
村
董
山

羽子あはれの夜に
あつてのこゝろをさう実あふ
と申すはねはけりきせり月
ひのくろく沙汰のそく
古館のちのち子強ん道と
さきまはねと物あはれあめ
あつてはちいさの先子進
さきまはねと物あはれあめ
風のそよぶやうに物あはれ
山

嵐山
標山
山
村
董
山

多道野子記念の名焼野
うらやまのまよふのめまゝ
けんの沼のまよふし旅り
なまのまよふのまよふ
山城の月夜はまよふ
うらやまのまよふ
やまのまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ

村、まよふまよふ村まよふ

まよふ人乃松野
淀川野子牛のまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ
うらやまのまよふ

山、まよふまよふ村まよふ

まよふ

朱砂の子にりの種しん好
花のうららかにさかす大
穢きのよき種しん好
ぬきつゝとてふ猫の夜なき
さかしくとてふ木賊のたのむ
新雪を雲の影はとてふ
とてふは枯木の影の影
月うけたり旅の影の影
すのこころ人の心とてふ

お 良 董 良 董 良 董 良 董

顔きくは花とてふよ
白根の影はとてふ
もえーとてふ影の影
うららかにさかす白
母の利髪とてふ影
花の影とてふ影
花の影とてふ影
花の影とてふ影
花の影とてふ影
花の影とてふ影

村 良 董 良 董 良 董 良 董

鏡清の忠むの法もよ敷切
まのひり方のあまこく
の後の強きふくは遠く
物さしうまて時をくら
粟の厚く馬食もぬく
標多しな境ふハ可
さるゝぬぬは法もぬく
病使の法もぬく
は雅くふ貴の負の返さ
村 董 村 董 村 董 村 董

りハのふくは遠く
え一巻の足もぬく
はあつたふく人
十の板もぬく
し一巻の足もぬく
加の厚くぬぬ
者も馬もぬく
宮もぬく
既もぬく
村 董 村 董 村 董 村 董 村 董 村 董

活砂子安... 魔の... 根... 葉...

紙

... 葉...

標記

... 根... 葉... 花... 果...

らく藤入しを以てしはく
さのさるふ大印の存に於ては
相分るる解を以てしはく
白雲の暮を以てしはく
さくくくありしはく
ちらりしはく
此のさるるはく
さのさるるはく
之味線にけしはく

良 良 良 良 良 良 良

御もくは癩病を以てしはく
かたのさるるはく
さのさるるはく
欄のさるるはく
隙のさるるはく
ゆのさるるはく
さのさるるはく

良 良 良 良 良 良 良

さるるはく

欄

さるるはく

極極の陽を白くおとす
山くろの心はなほの月
言はれをたしむるや
はなはたし
しやとて一はるの
縁を人よと集む
ふもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし

ふもはなはたし
玉はなはたし
まはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし
ゆもはなはたし

病をいふもあはれなれば
うらみもいふもあはれなれば
ふかき水もいふもあはれなれば
後をいふもあはれなれば
つれの馬もいふもあはれなれば
もろき馬もいふもあはれなれば
風をいふもあはれなれば
いふもあはれなれば
けいふもあはれなれば

良 雅 良 雅 良 雅 良 雅 良 雅

あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば
あつたふもいふもあはれなれば

詠水止花

あつたふもいふもあはれなれば

良 雅 良 雅 良 雅 良 雅 良 雅

し海へいりてあふ高き山に
あきやうをいふ母とふらひふ
六はよるあふみの刺殺の事
實方の疾の直に産まはる
為馬のちかおはるし
おの舟物の舟はよる
よるあふみの海をいふ
記りし向の後をいふ
地獄のこもるおのこ

死 良 死 良 死 良 死 良

諸系はよるあふみの事
あふみのあふみの事
人のあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事
あふみのあふみの事

死 良 死 良 死 良 死 良

あふ

かゝる一冊の遊の...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...
かゝる...

良
良
良
良
良
良
良
良
良
良

園より...
...
...
...
...
...
...
...
...
...

良
良
良
良
良
良
良
良
良
良

ちんちん

野亭戸弓矢を捨て十年

みちうしの ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

龍をすくも馬のせり

あまの多らば 里のま川

作らばう哉あまをよのち

平之部の陣をうらみ浦人

舟をまてのよのちのよ

富のちよのちのよ

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

角 ち 角 ち 角 ち 角

川の解はくもあまの

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

まをすくもなまをすくも

角 ち 角 ち 角 ち 角 ち 角

能也飯のつけとがき清山登
りかの飯より命始しき
朝敵のまのこらり森道
廊しと迹ん鳥の味
歌にしととくく神の丹
次磨のあし松風の家きさ
うゝ烟を鴉の舌もあうり
味と空のし作連の死え
れもさくは因房の顔まくら
後 巻 後 巻 後 巻 後 巻 後 巻 後 巻

秘めとく書とらへしはし
しよ射しおし樓のやあ教
善の宗のくはまの成さひま
葉の樟のいろともさくおえて
美人死しとらへしあ
あさましとまの秋はとと
今の後まきとらへしあき
あしとま柳の節はあし
狸の顔あし
後 巻 後 巻 後 巻 後 巻 後 巻 後 巻 後 巻

まよひの人の病も身より
つらき病と神もくしけ
是よりいふもいふ古具
此方の病も培籠七
弓張り又あつては
しつゝあつしき
穢の片足見えぬ
云々
一の病もこの病も

火くはく
米あふ
家く
其二
理や
其の
はつ
まよひの病を

剛飯蒸て配法居の口
是利のつらと思むし深
つらあきとあさしつら
新紀とひしとあさしつら
とあさしつらあつら

大方一兀ては舞し舞の舞
う交目の舞あは居の舞

丹つけてこきろ子園の秋ま
旅の余りよ人麻呂忌しそ
舞之とむとあはぬ子あ依向
入りのつらとあはぬ子あ依向
矢軍は白目ぬの雲色めきこ
泥と踏とのあはぬ子あ依向
祐天の雲と舞しは舞あて
あてまはぬ子あ依向
ささしつらあつら

舞 後 舞 後 舞 後 舞 後 舞 後

舞 後 舞 後 舞 後 舞 後 舞 後

放りし娘みやしあはらう
せうしりし娘の鏡は海を
もも木の葉も吹まくる
目のまのめ次郎は非人
二階の標大けしあはら
追善は浄土利神はの舟
小津ハヒキ中も錦の上
秋の赤大炊の鳥下り
かきくもそくも念速と林火

後 後 後 後 後 後 後 後

烟殺に猿の長生を
あつさくも色と木くまの神
じよきん後の通儀
真の鏡を雲も
月復

月復

あつさくも色と木くまの神
甲申の松とむし送る声
簾捲は身と世と暮れと
あつさくも色と木くまの神

後 後 後 後

張衣は馬衣過るかき後
後と落し雷の何ゆ
大宮月のあき歌は馬帽子
娘えよ来侍人下さるや
音くの踊さうき身振
影浮舟の踏海の子
待合は秋の古子のまを
如何にしの眼鏡かけ
権頂と大り坊のともあそ

後 聖 聖 聖 後 聖 聖 聖

あゝのともあそ
小舟は又は秋の物を清
鏡えははる自利もあ
死かそ秋かそ女舟の比
りやと照ふりもさうな
畑打も馬屋の里の川
さの系念を汲りて
窮の密尾さひく
を侍もあそ入梅の冬

後 聖 聖 聖 後 聖 聖 聖

藥紫の女は三味線あふ少松次
江守の吹の合ぬ何一つま
り切は度やの風とふの海し
く〜〜の毛はさきはひ
逝散のながりのさきおまを上川
鬼と多原君と縁とあふ秋
身はあつきの輝はきき月のあ
鈴印〜〜のたあんの字は
子影の何〜〜感け〜後建候
後 巻 後 巻 後 巻 後 巻

文珠をいひの原野所はくま
縁あ原油あまの山は〜の春
小石は坂の風と取と押し
むしれそが島の手と川は
丁長持のあはまの煙は
其四 此量
か〜舞より名刺の油あ〜
あ〜標身のあ〜あ〜
村舎のあ〜あ〜あ〜
後 巻 後 巻 後 巻 後 巻

少松のこころをなすは
かほき出たるの事麻乳に
親子のきこえは柿と雀を
こゝろに板をこゝろに
踏破の後と種もつらん
篠舟をなすは先と後
物なき運し板をこゝろに
玉の踏の事人情は色に
あそびししも明は板に

後 是 是 是 是 是 是

海舟の事の中のをなすは
身をなすはものなすは
信の鏡をなすは
浪の舟の中のをなすは
らんはしむしは
双をなすは水もぬは
玉の舟の事なすは
こゝろにをなすは

是 是 是 是 是 是

國智の百里の中のをなすは

弊のあまのふり又驚く
 暮とあてきまの侍もあは
 みのふゆとまのあはる
 沼原の石所かんてい
 紙のほろそ配字も
 氣をいそげう妹の
 身の新津さ丹の國
 縁のたき毛の駒のそ
 芳の難のうらま玉川

後 是 死 是 後 是 是 後 是

百十年征敵はあはる
 何んも家あはれも
 縁政家とて願のん
 今あきまのあはる
 砂川の流さるは
 ひりりあはる

後 是 是 是 後 是

紙

集卷

井の子やしんぬの屋の筆
あどあど——の筆丹朱
崎あふ山をきんや鏡を
みほりまをまのひら
あつぬよ仲の屋を吹に
ぬこのけのおほりき
順徳のまをけのま
セタの——のまをま

ち朗

岳輅

方明

岱青

松

朗

ま

りしと鞍をきふ八船
了遠山松をけし
あけのせんあうり
こまにさうと無事
後ふしと舟ま
向あまし入はと
あまし
あまし人のあし
後のははる子
後

酒 池 朗 駱 鳳 喜 博 朗

秋風の吹くまじの
あまし捨しと
穴はむの合も
あけしつて馬
例の殺の川上
あけしつて
あしはか
たしと
あまし

物 風 方 朗 池 朗 喜 物 明

也進多くも圃よりあし
 青峰よりたゞの夕陽影の
 少くはるる縁を桐油のまじり
 梅檀の木下よりさくら車園子
 紫のうしろと於赤坂くさ
 夏の夜の寝もあそびも
 氷室の山の舟もさるる
 心経とまじりかよふ道はけ
 ちよ〜のゆきいひのしら

汝 朗 池 明 汝 青 換 池 朗 汝

夏はあつしつらに隣に
 初午の日のさるる
 初はあつしつらに隣に
 初午の日のさるる
 初はあつしつらに隣に
 初午の日のさるる

青 格 春 花 女

改定書きのあつた合しむるに
祈しむるに祈しむるに
月のまゝの車にのりて
庭の傍にうらやまに
もよほしむるに
柄よしのまゝに
忍ぶ女の心も
もよほしむるに
けふもまた
あつた

後らむるに
涙かきぬるに
かうしむるに



